様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３３９０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ１２１００

研究課題名（和文）看護師が経験する患者に対する陰性感情と看護師支援に関する研究

研究課題名（英文）A Study of Negative Feelings in Nurses toward Patients and How Support the Nurses

研究代表者
松浦　利江子（MATSUURA, Rieko）

金城学院大学・付置研究所・准教授

研究者番号：５０５３５９９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：患者の尊厳遵守に価値を置き、良好な関係性の構築と維持を重要視する看護師が、看護実践の過程において、様々な状況によって患者に対して陰性感情をもつに至る経験に着目し、その要因を多角的に検討し、それをふまえた看護師支援策を検討した。その結果、患者に対する陰性感情の経験頻度よりもその経験に対する嫌悪感の程度に注目し、過度な嫌悪感を持つに至らないようにすること。そして、患者の言動が示す意味を理解するための支援、仕事へのやりがいを感じるための支援、仕事の方針に自分の意見を反映できていると思えるための支援、自尊感情を高める支援が、臨床場面に即した看護師支援策であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究により、種々の状況によって患者に対して陰性感情をもつ経験が看護師に対して負の影響を及ぼすのは、その経験頻度ではなく、その経験に対して看護師自身が抱く嫌悪感の程度であることがわかった。また、患者の言動の意味の理解への志向性、仕事にやりがいを感じること、仕事の方針に意見が反映されたと感じられること、自尊感情が高いことが道徳的感受性と有意に関連していることから、看護実践は「感情労働」の側面だけでなく、専門職としての誇りや自律した実践への志向が強く、看護師支援への方向性の示唆を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：The study focused on the experiences of nurses who develop negative feelings toward patients in various situations in the process of nursing activities, while placing importance on building and maintaining good relationships with patients by preserving patient dignity. We examined the factors related to the negative feelings toward patients from various viewpoints and discussed measures to support nurses. The results showed that it is necessary to prevent nurses from feeling excessive aversion experienced in the activities when developing negative feelings toward patients, by focusing on the degree of aversion rather than the frequency of developing such feelings. It is also suggested that nurses need support that helps them understand the meaning of patient behaviors, feel rewarded in their work, feel that own opinions are reflected in the workplace, and improve self-esteem, as well as support in line with the clinical settings.

研究分野：臨床看護学

キーワード：看護倫理　道徳的感受性　患者-看護師関係　陰性感情　自尊感情

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

人々の権利意識の高揚や、サービスとしての医療という認識の定着（厚生省編 平成 7 年版厚生白書）、関連情報へのアクセスのしやすさなどにみる情報環境の変化もあり、臨床場面における患者・家族への倫理的配慮がますます求められるようになっている。医療機関における倫理研修会も積極的に設けられている。看護職の行動指針が示された「看護師の倫理規定」（1988 年日本看護協会）では、対象となる人々の「人間としての尊厳および権利を尊重する」ことに努めることが明記されていたが、2003 年に改訂された「看護者の倫理綱領」においては、「対象となる人々との間に信頼関係を築き、その信頼関係に基づいて看護を提供する」という条文が加わった。患者との良好な関係性の構築およびその維持は、よりよい看護を提供するための前提として重要視している。そして看護師は、この理念を日々臨床において実践することに努めている。

ところで看護師は、病を得て身体的・精神的に困難な状況にある患者やその家族と向き合い、必要な看護を提供する、その過程で看護の対象者から、時に理不尽と思われる言動をとられることもある。それは、患者/家族が置かれている状況が困難であることもその一因であり、患者/家族にとって身近な存在である看護師はしばしば、一時的に様々な感情をぶつけられる、ということがある [1)]。そのような状況に遭遇した時に、看護師の中に患者/家族に対するネガティブな感情が生じることが避けられない場合もある。加えて、相手にそのような感情をもった自分自身に対して看護師は倫理的葛藤を抱く。すなわち、看護師としての価値観とは異なるからである。したがってそこには、バーンアウトや離職につながる要因が潜んでいるという点でも看過できない問題である。しかし、感情という原初的な事象にまつわる葛藤に対して、看護倫理理論の活用や、「陰性感情」をもったことへの意味づけ、ストレス解消のための方法の提案だけでは対処には限界があった。

社会学者の Hochschild, A.R.[2)]による「感情労働」という視点は、このような性格の看護師の業務が孕む問題を浮き彫りにさせ、看護学者の武井 [1)3)]、P.Smith[4)]は、「共感疲労」などの視点を紹介することを通して看護業務に潜在する問題点をあぶり出した。しかし、そのような業務に従事し続ける看護師への支援策構築への課題が残された。

本研究は、看護師の患者に対する陰性感情経験を多角的に検討し、関連要因、影響要因などを明らかにしたうえで、最終的にはそれをふまえた看護師支援策を構築することを目的に取り組んだ。

２．研究の目的

看護実践の過程において、患者に対して陰性感情をもつ看護師の経験に着目し、多角的に検討して、関連要因を明らかにしたうえで、それをふまえた看護師支援策を構築することを研究の目的とする。

３．研究の方法

研究者らは、本科学研究費研究に取り組む以前の 2014 年に、患者に対する陰性感情経験頻度を測定するための「患者に対する陰性感情経験頻度測定尺度（NFPF）」を開発し [5)]、それを用いて精神科看護師を対象にした研究を実施した [6)]。その結果、患者に対する陰性感情経験の頻度ではなく、嫌悪度が高いほど看護師の自尊感情が低下すること、人的・物的環境の制御力としての患者支援技術を持ち合わせているほど自尊感情が高いこと、問題の当事者と話し合う対処法をとる人ほど自尊感情が高いという結果を得た。対象看護師をさらに広げること、患者に対する陰性感情経験に対する嫌悪感の程度に差を生じさせる要因について探究する必要性が課題となった。

本研究では、以下の 2 つの手法を重層的に組み合わせつつ、改めて研究を実施した。

１）研究１-１　「患者に対する陰性感情経験についての質問紙調査」

（１）研究方法：自記式質問紙調査（調査内容は、患者に対する陰性感情経験頻度および患者に対する陰性感情経験嫌悪度、改訂版道徳的感受性質問紙日本語版（J-MSQ[7)]、Rosenberg[8)]による Self Esteem Scale の邦訳版 [9)]、基本的属性、職場環境因子）

（２）調査期間：平成 30 年(2018 年)3 月～4 月

（３）調査対象：東北地方にある 15（総合病院 6 施設、精神科病院 9 施設）の医療機関に勤務する看護師 1500 名。

（４）**分析方法①**：患者に対する陰性感情経験に対する嫌悪度の合計得点を従属変数とした重回帰分析を行った。

分析方法②：分析①の結果から、患者に対して陰性感情をもつ経験に対して過度に嫌悪感をもつことのない支援の有効性が示唆されたことを踏まえ、次に、道徳的感受性を目的変数にした重回帰分析を実施した。

（５）倫理的配慮：人間環境大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 2017N-016）。

２）研究１-２　「精神科病院、総合病院の各１施設に勤務する全看護師を対象にした患者に対する陰性感情経験についての質問紙調査」

研究 1-1 で得たデータは 15 施設を対象にしたものであった。患者に対する陰性感情経験嫌悪度と関連がみとめられた項目は、自尊感情や、高い道徳的感受性等の、看護師としての言わば内的な価値観であり、これらは施設ごとに異なる職場環境や組織としての理念や方針に影響を受けることが考えられた。そこで、外的要因を均一にして内的価値観の相違が結果に表れやすくするために、調査施設を絞り込み、その施設に勤務する全看護師を対象にした調査を実施することが必要であると考え、以下の調査に取り組んだ。

（１）研究方法：自記式質問紙調査（調査の構成内容は、研究 1-1 と同様である。ただし、道徳的感受性質問紙については、2019 年に公表された改訂版「道徳的感受性質問紙日本語版 2018」（J-MSQ2018）[10] を用いた。）

（２）調査期間：令和元年(2019 年)11 月、令和 2 年（2020 年）6 月

（３）調査対象：中部地方にある、当該地域の医療において中核的な役割を担う、１精神科病院に勤務する全看護師 200 名、１総合病院に勤務する全看護師 461 名を対象に質問紙調査を実施した。ただし、いずれの病院も管理職者は調査の対象から除いた。

（４）分析方法①自尊感情尺度合計得点を目的変数として重回帰分析を実施した。

（５）倫理的配慮：金城学院大学ヒトを対象とする研究に関する倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 R19006 号）。

（７）分析方法②：研究 2 の結果を受けて、道徳的感受性を目的変数にして重回帰分析を実施した。

３）研究２　「研究１の結果をふまえた聞き取り調査」

（１）研究方法：半構成面接

（２）調査期間：令和 2 年(2020 年)11 月～令和 3 年(2021 年)1 月

（３）調査対象：中部地方にある、当該医療において中核的役割を担う 1 施設に勤務する看護師８名。内訳は、1 年目、2～3 年目、5 年以上、管理者各 2 名ずつ。

（４）分析方法：Krippendorff[11]による内容分析、および、現象学的質的研究 [12]の手法を参考に、質的分析を実施した。

（５）倫理的配慮：金城学院大学ヒトを対象とする研究に関する倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 R20002 号）。

４．研究成果

本研究の成果を以下に示す。なお、新型コロナウィルスの蔓延による社会活動の制限、および協力機関の諸事情により、「研究２」として予定していた聞き取り調査を実施することが計画からずれ込んでしまったことから、最終年度の交付額の一部の繰越を２回に渡って申請をし、いずれも承認をいただき、全体の研究を実施することができた。

１）＜研究１＞　患者に対する陰性感情経験についての質問紙調査

１）研究１-１　15 施設に勤務する看護師を対象にした質問紙調査

（１）患者に対する陰性感情経験に対する嫌悪度の合計得点を従属変数とした重回帰分析の結果は以下のとおりだった。

結果①：有効回答数は 410 部（有効回答率 27.3%）であった。自由度調整済み決定係数は 0.24($p<0.01$)であった。陰性感情経験嫌悪度と有意な関連がみとめられた項目は、勤務している病棟の異動を希望している（$\beta=0.19$、$p<0.05$）、職場で困った出来事に遭遇した時に酒や薬に頼る方法では対処しない（$\beta=-0.18$、$p<0.05$）、自尊感情が高くない（$\beta=-0.40$、$p<0.01$）、道徳的感受性が高い（$\beta=0.27$、$p<0.01$）、患者に対する受身的陰性感情経験頻度が高い（$\beta=0.33$、$p<0.05$）ことであった。道徳的感受性が高まるほど、患者に対する陰性感情経験への嫌悪度も強くなることから、過度な嫌悪感を防ぐ支援、適切なストレス対処方法の獲得、自尊感情の維持も視野に入れて看護師支援策を検討する必要性が示唆された。

（２）道徳的感受性を目的変数とした重回帰分析の結果は以下のとおりだった。

結果②：自由度調整済み決定係数は 0.24($p<0.01$)であった。その結果、道徳的感受性と有意な関連がみとめられた項目は、陰性感情経験に対する嫌悪感（$\beta=0.15$、$p<0.01$）と共に、自尊感情が高いこと（$\beta=0.24$、$p<0.01$）、仕事に対して自分の意見が反映していると思うこと（$\beta=0.17$、$p<0.01$）、仕事にやりがいを感じていること（$\beta=0.15$、$p<0.05$）であった。以上から、看護師が直面する患者に対する陰性感情経験への支援としては、陰性感情経験の頻度よりも、その経験に対して看護師がもつ嫌悪感に注目すること。また、そのような患者の言動の理解を促進するための支援、仕事へのやりがいを感じることができるための支援、仕事に自分の意見を反映するための支援が臨床場面に即した看護師支援策であることが示唆された。

（３）まとめ

結果①、結果②から、道徳的感受性が高まるほど患者に対する陰性感情経験への嫌悪度が高まることが示唆された。また、道徳的感受性は高い自尊感情、仕事に対して自分の意見が反映されて

いると思えること、やりがいを感じることと関連していた。患者の尊厳を守り、それぞれの患者の考えを尊重した看護を提供するためには、道徳的感受性は重要である。しかしこれを洗練させることで看護師が抱え込むことになる負の側面（嫌悪度の高まり、など）をカバーし、バーンアウトや離職に転じてしまうことを防ぐためにも、仕事への意見を述べる機会を確保する支援、やりがいを感じられるための支援が効果的であることが示唆された。

２）研究１-２　精神科病院、総合病院各１施設に勤務する全看護師を対象にした質問紙調査

施設ごとに異なる職場環境や方針による影響を均一にするために調査施設を絞り込み、当該施設の全看護師を対象にした調査を実施した。

（１）自尊感情尺度合計得点を目的変数とした重回帰分析の結果は以下のとおりだった。

結果①：精神科看護師の場合、道徳的感受性のうちの「道徳的強さ」が高いと自尊感情も高いが、「道徳的気づき」が高いと自尊感情は低いことを明らかにした。ところで自尊感情は、看護師の仕事を心身の健康を維持しながら続けていく上で重要である。本研究で、看護師の自尊感情と有意な関連がみとめられた職場環境要因は、別の仕事に就きたいと考えていること（β=-0.83、p<0.01）、超過勤務時間が長いこと（β=0.50、p<0.05）が低い自尊感情と、困った時の相談相手に上司が入っていること（β=0.43、p<0.01）は高い自尊感情と関連していることを明らかにした（松浦 2020）。

（２）道徳的感受性を目的変数とした重回帰分析の結果は以下のとおりだった。

結果②：一般科看護師の場合、道徳的感受性と有意に関連していている項目は、自尊感情が高いこと（β=0.24、p<0.01）、仕事に対して自分の意見が反映されていると思うこと（β=0.18、p<0.01）、仕事にやりがいを感じていること（β=0.15、p<0.01）、患者に対する陰性感情経験に対する嫌悪度が高いこと（β=0.15、p<0.01）であることが明らかになった。陰性感情経験に対する嫌悪度は、道徳的責任とも有意に関連していた。一方、精神科看護師を対象にした分析結果では、患者に対する陰性感情経験に対する嫌悪度は、道徳的感受性と関連していないことを明らかにした。

（３）まとめ

道徳的感受性が高いことと関連がみとめられた項目は、15 施設を対象にした調査結果も、１つの一般科総合病院に勤務する全看護師を対象に限定した調査結果も変わりがなかった。このことから、看護師の倫理観は職場環境に影響されて形成される面もあるが、それ以前、たとえば看護師になることを志した段階や、看護基礎教育課程において基盤が形成されるとみることも可能と考える。したがって、職場環境の整備は、看護師が仕事へのやりがいや自分の意見が仕事の方針に反映されることを感じられるなど、看護師自身の仕事への向き合い方が肯定的に保持されることを念頭に置いた整備が有効であると考える。

ところで、患者に対する陰性感情経験に対する嫌悪感が高いこと（研究 1-1）、および、道徳的気づきが高いこと（研究 1-2）と自尊感情の低さの間に有意な関連がみとめられた。これらは、道徳的感受性が看護師に少なからず負荷をかけていることを示していると考える。仕事に前向きに向き合い、患者と真摯に対する際に必要となる豊な感受性が含みもつ、看護師に負荷を強いる側面にも留意した支援の必要性が示された。

３）研究２　「研究１の結果をふまえた聞き取り調査」

看護師は、患者に対して陰性感情をもった時に一時的に自分自身の感情が揺さぶられてネガティブな心境に傾くものの、その後、患者の行動の意味の理解に努めようとする方向に思考を切り替えていた。この傾向は、経験年数に関係なかった。そしてその際、専門知識から患者の行動の理解や、より効果的な支援方法について検討すること、スタッフ間での情報交換等から患者とのかかわり方のヒントを得ること、などが支えになっていた。また、看護師の考え方の底流には常に、患者を理解すること、提供する医療やケアについて患者の理解を得たうえで実施することを重要視する価値観があった。支援へのニーズとしては、「話し合える場」を作る、先輩看護師からの助言などを受けるサポートへのニーズが高かった。

以上から、病棟カンファレンスやスタッフ同士で気軽にアドバイスし合える時間や場所の確保に加え、その際、看護師の志向は患者の言動が意味すること、ケアの必要性についての患者からの理解を得ることに向いていることを認識し、その点が明確になるような相互支援、仕事へのやりがいを感じられるような相互のサポート、また、道徳的感受性の豊さから派生する看護師の心理的負荷へのフォローが望まれる。

＜引用文献＞

１）武井麻子、 2001、感情と看護：人とのかかわりを職業とすることの意味、医学書院.
２）Hochschild, A.R.,1989/＝石川准・室伏亜希訳、2000、管理される心：感情が商品になるとき、世界思想社.
３）武井麻子、2006、ひと相手の仕事はなぜ疲れるのか：感情労働の時代、大和書房.
４）P.Smith,1992/＝武井麻子・前田泰樹訳、2000、感情労働としての看護、ゆみる出版.

５）松浦利江子・鈴木英子、2014、患者に対する陰性感情経験頻度測定尺度の開発、日本保健福祉学会誌、21(1)、1-11.
６）松浦利江子・鈴木英子、2017、精神科看護師の自尊感情の関連要因：患者に対する陰性感情経験を視野に入れた検討、日本看護科学学会誌、37、319-328.
７）前田樹海・小西恵美子、2012、改訂道徳的感受性質問紙日本語版（J-MSQ）の開発と検証：第１報、日本看護倫理学会誌、4(1)、32-37.
８）Rosenberg M., 1965, Society and the adolescent self-image. Princeton University Press, New Jersey.
９）山本眞理子・松井豊・山成由紀子、1982、認知された自己の諸側面の構造、教育心理学研究、30、64-68.
10） 前田樹海・小西恵美子・八尋道子・福宮智子、2019、道徳的感受性質問紙日本版 2018（J-MSQ2018）：下位概念「道徳的責任」を見直して、日本看護倫理学会誌、11(1)、100-102
11）Krippendorff.K.,1980/＝三上俊治・椎野信雄・橋元良明訳、2003、メッセージ分析の技法：「内容分析」への招待、勁草書房.
12）村上靖彦、2019、現象学でよみとく　専門看護師のコンピテンシー、医学書院.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 松浦利江子	４．巻 -
２．論文標題 看護師の道徳的感受性とその関連要因：精神科看護師と一般科看護師との比較検討	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本看護倫理学会誌	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松浦 利江子	４．巻 24
２．論文標題 精神科看護師の自尊感情の関連要因	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本看護管理学会誌	６．最初と最後の頁 186～198
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19012/janap.24.1_186	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Rieko MATSUURA, Eiko SUZUKI, Akihiro MATSUURA	４．巻 ー
２．論文標題 Relationship between feelings of disgust experienced when nurses develop negative feelings toward patients and moral sensitivity	５．発行年 2019年
３．雑誌名 GSTF Digital Library	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5176/2315-4330_WNC19.255	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 松浦利江子
２．発表標題 看護基礎教育課程の種別にみる看護師の道徳的感受性の関連要因
３．学会等名 日本看護倫理学会第15回年次大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 松浦利江子
２．発表標題 患者に陰性感情をもつ経験に対する嫌悪度と道徳的感受性
３．学会等名 第12回日本看護倫理学会年次大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Rieko MATSUURA
２．発表標題 Relationship between feelings of disgust experienced when nurses develop negative feelings toward patients and moral sensitivity
３．学会等名 World Nursing Conference 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鈴木　英子 (SUZUKI Eiko) (20299879)	国際医療福祉大学・医療福祉学研究科・教授 (32206)	
研究分担者	松浦　明宏 (MATSUURA Akihiro) (60344636)	中京大学・国際教養学部・教授 (33908)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関